

(18) 幼きものゝ身まかりけるとき

とりなれしぬしを別てよろぼへるはにの小牛のなきぬべきかな

(鰻玉集・枉園詠草)

幼児の後に残された土製の小牛の玩具を見て悲しんでいる。小牛を擬人して吾が心の悲しさを感情移入したのである。高い作歌技術が窺えるが、それを通して実感が沁み出ている歌である。全歌数四六五一首の中の一部分を見ただけであるが美隆は注目すべき歌人である。

註

(1) 和歌文学会発行『和歌文学研究』第二九集(昭和四八、六刊)拙稿「近世末期地方歌壇の様相について」

―類題和歌集と地方歌壇の関係―

(2) 右同。

(3) 山本嘉将氏蔵木版本による。

(4) 系統は、佐佐木、福井博士各『近世和歌史』や『和歌文学大辞典』で違っているのがある。

(5) 『類題鰻玉集』序文。山本嘉将氏『加納諸平の研究』

(6) 佐々木弘綱の『加越日記』(明治十三年)によると藤原純門は多羅尾氏、近江信楽の領主であるが、幕府領伊勢石葉師駅をも治めていた。ここは弘綱の生地である。純門侍臣藤尾景秀が足代弘訓門の同門であったので弘綱を純門の師に推挙した。これが縁になって『千船集』を編集することになった。多羅尾氏北の方は越前大野土井侯の女であったので、景秀は大野の歌人布川正沖と親友になり、弘綱も正沖を知るようになり、明治十三年に越前、加賀に來遊した。

「此駅維新は幕府領にて近江多羅尾あづかり治められたりき。其多羅尾氏につかふる人の中に藤尾景秀といへる人ありけり。皇學に志深く歌をもよくよまれたりき。弘綱いと若き時足代翁のもとに物學せしほどよりしる人にてしたしかりければおのれをすゝめて多羅尾氏の師とはせられにけり。」とある。

(7) 熊谷武至氏『類題和歌集私記』

(8) 重複歌人。近世名家五四〇人中二七四人

(9) 『中島広足全集』。

(10) 香川景樹『随聞随記』兼清正徳氏『桂園派歌人群の形成』

(11) 黒岩一郎氏『香川景樹の研究』

(12) 『随聞随記』

(13) 『和歌文学大辞典』『近世和歌史』

(14) 熊谷武至氏『類題和歌集私記』

(15) 土橋真吉氏『河内先哲伝』子孫は東大阪市花園町岩崎正夫氏。

(16) 歌集『枉園詠草』には新古今風がある。

(17) 『河内先哲伝』『岩崎美隆』

(18) 美隆の歌集『枉園詠草』には子を悲しむ連作が十一首あり、その中の一首である。

何事を思ひましてかたらちねの母の乳房を児はそむきけん
昨日今日かたるざりせし緑子の死出の山路をいかに越ゆらん
親をしもふりすてんとて朝夕にはにの小鈴や手にやならしし
さらばよといふ一声もならはずていかに別れし此世なるらん
嬰兒のさこそまなきわがならめただ捨てかは親をすつべき
ふりすてしこの形代をとりみてはにの小鈴の音こそなかるれ
嬰兒がとりまさぐりし笛の音も常なき風や吹きあはせけん
(以下略)

(19) 美隆の歌集『枉園詠草』

(著者一般教養 昭和四十八年一月十四日受理)

う。

五

『鰻玉集』の第五編に突然現われた岩崎美隆は、五、六、七編で一七九首を採られた。『千船集』には少数採られただけで無名歌人である。美隆は河内国花園村の人で代官を勤め、村田春門が大阪にいた時入門した。後、加納諸平、伴林光平等と交わり弘化四年四四歳で没した。

美隆の歌は古今、新古今を摸した歌は極めて少い。叙景の歌がかなりあるが、それでも叙情性があるのが特色である。

紅のうす花薄うちなびき朝日さやかに野は成にけり

(鰻玉集・美隆・薄)

田鶴のねはおきつしまねにしづまりてみ空たか行秋の夜の月

(月)

夕附夜今さす窓のきりすだれみじかき花の影にほふなり

(夕月)

さらしゐの水かげ寒き夕月にもよほされても打衣哉

(掃衣)

とぶてふのかげははかなき秋の日にちよのかざしの菊咲きにけり

(菊)

北山の松はおぼろに雪見えて雨うちかすむしづ原の里

(里春雨)

神なびのみむろのきしの春風に咲もくづれぬ山吹の花

(山吹)

「さやかに」「みじかき」「水かげ寒き」「かげははかなき」「松はおぼろに」「咲もくづれぬ」などという感覚が叙情的にしている。美隆にはこの感覚に新鮮なものがある。

一ひらはさすがに散て入相の鐘よりのちの花ぞ霞める

(鰻玉集・夕花)

鐘つきて春をとぢめし山寺の木がくれにしも花ぞ残れる

(余花)

川舟のとまもる霧を御にも松にも見せて飛はたるかな

(川上堂)

風清き宇治の木のはしりつみ都の夏とはや成にけり

(首都夏)

庭つ鳥かけのたり尾の長らかにしめ引窓のひま白みけれ

(立春曉)

美隆には叙情歌にも佳いものがある。

蓮の目を拾ひがてらに明日もこん池のさゞ波秋立ちにけり

(鰻玉集・立秋)

此ごろの春こそ雨はうれしけれ柳の露ようめの雫よ

(春雨)

星ばかりきらめきそひて夜はふけぬさはさて月の出る山かは

(待月)

山鳩の来ては友よぶ吾やどの松のこぼれ葉踏人もなし

(山家)

述懐の歌の中に次の歌がある。

苔の花忍ぶのみぢこれのみをわがかくれがの春秋にして

(枉園歌集)

いかにしてきゝだにきかじみだにみじ歌のさかしら道のしひごと

(〃〃)

おほかたの世にすげなくて花をのみ知るべき身ともなりにけるかな

(三九歳暮)

新古今的技巧のないのはここにふさわしいと思われるが、もう少し長生きしたら近代の実感に近づいたかも知れないと惜しまれる。

さは姫のいかにおりてか天地のきする霞の衣なるらん

(" 霞高低)

こゝちよき物のきはみははしゐして水の音きく夏のうたゝね

(" 納涼)

葛の葉のうらみせそめし風たえて又もあつさにかへりぬる哉

(" 残暑)

くずかづらくる秋ごとに葉はうらみ花はほゝゑむ物にざりける

(" 葛)

秋萩の花さくなべに春霞たつを見すてし照はきにけり

(鰻玉集)

引よぢてあらくなをりそ園の梅かはせる枝の花もこそちれ

(")

このような歌風は平凡な説明に終わる歌に陥りやすい。

くれなるのこぞめのうめはしら梅のちりそめてこそ咲そめにけれ

(千船集・尊孫・紅梅遅)

うらゝとあそべるいとは見る人の心を空につなぐなりけり

(" 遊糸)

春ごとにはなと桜は春ごとにはじめてみたるこゝちこそすれ

(" 花)

比良山の花のさかりはしがの浦の海に漕ぎ出てこそみるべかりけれ

(" 湖辺花)

空にのみうかるゝひばり春されば高つ鳥ともいふべかりけれ

(" 雲雀)

この種の歌はまだ数多ある。「春ごとに」を一首の歌の中に二回も使っているのは、堂上流の禁制を破るものとして面白いが、平俗な説明は当時歌壇の大家としては遺憾な歌風である。

しかし、流石に実感と思わせる歌もある。彼は神官として高い位にいたので、神祇の歌では感動をこめて詠んでいる。

なりいでし千五百万の神も皆わが皇国をまもるなりけり

(千船集・神祇)

いとゞしくたふとも有か大社神の宮ゐのはじめおもへば

(" 出雲)

ねがふ事ある時にのみ木綿櫛手向て神をたのむべしやは

(" 神祇)

里毎に新宮たてゝ人皆の神を尊む世に成にけり

(" 社頭)

さまゞに昔をしのぶあまりには神代をさへにおもひつらねて

(" 懐旧)

この種の歌は題詠ではなく実感を詠んでいるのが注意される。

見たせば千町八千町やかほの足穂の秋となりにけるかな

(千船集・穂)

かめにさすこの一枝は家人のかの山ざくらをりてきつるか

(" 遠近花)

国々の人のまゐくる都べはひなのてぶりもかつまじりつゝ

(" 皇都)

うちとけてゐませ客人みだれごのみだりがはしき宿にはあれども

(" 旅宿基)

このような実感を思わせる歌が僅かでも見出せることは幸である。又、『鰻玉集』には、

大かたは春のよそげに思ひなすえぞが千鳥や先かすむらむ

(立春)

「えぞが千鳥」という新しい素材を題詠ではあるが使っており、

山梨の花の雪散る木の本を翹かるげにとぶ燕かな

(燕)

出雲山いつか朝日に雪消て杵築の里はうららかすみつゝ

(出雲)

このような写生的な歌も僅かながら見出せるのは時代の反映である

「田舎にて」と題があり、實際経験であることを示しており、歌そのものも説明的であるが実感的である。これは広足の作品の救いである。彼が類題和歌集の世界で重んじられたことは、当時歌壇の保守性を示しているが、その中にも、一抹の近代性を窺わせる。

よしの川おちくる波の夕千鳥いもせの山の中になくなり

(千船集・河千鳥)

ゆふぐれの霞のうちに打ならす朝妻舟のつゞみおもしろ

(海辺霞)

角田川堤つたひに見る花は馬よりもよし舟よりもよし

(河辺花)

これらの歌も当時としては新味を感じさせる作品である。

四

⁽¹³⁾ 千家尊孫は出雲杵築出雲大社の神官である。天保三年大社の御杖代兼国造職を継いで大社神官の指導者となったが大社を中心とする出雲国杵築歌壇の中心人物であった。安政四年(一八五七)に出版された歌集『はなのしづ枝』には五〇人の杵築歌人の作品が集められている。彼も『類題八雲集』という出雲国歌人の作品を集めた類題歌集を天保一三年に出版している。明治五年、八〇歳で没した。学問は鈴屋系であるが歌は系統が明かでなく、景樹、諸平、依平等と親交があった。

『鰻玉集』『千船集』の彼の作品を見ると、新古今風、万葉風の歌も極めて少ない。新古今風の歌は、

鳴のたつ後には水の音もなし山田の沢の秋の夕ぐれ

(千船集・尊孫・水辺秋夕)

比良山の雪の夕ばへかへりみてゆく袖寒し勢田の長橋

(冬橋)

ふつゝかになく鳩のねもあはれ也秋くれがたの夕暮の雲

(暮秋鳥)

時鳥まつとせしまにしらみけり一村雨の後の月かけ

(鰻玉集・尊孫)

春深くなりにつらしたち山の吹雪も絶て霞む月影

("

夏衣まだはださむき朝風に藤の花散まつ崎のさと

("

等が挙げられるが、新古今調として佳作とは言われない。尊孫には新古今調の影響は少ない。万葉調の歌も二、三ある。

君を思ひかちよりくれば木幡山駒のはむてふあしび咲なり

(千船集・尊孫・馬酔木)

月もよし川のせひかりとぶ鮎をみてかへりこむすゞみがてらに

(納涼)

見たせば千町八千町やかほの足穂の秋となりけるかな

(穂)

はこね路を月にこゆればこゆるぎの磯の波わけ夜舟こぐみゆ

(鰻玉集・月前遠望)

万葉集の歌を利用しただけの歌で、これ以外にはない。僅かでも万葉調を見せているのは時代の故である。

それらに反して、古今風の作品が多く、観念的になり過ぎて失敗した歌も多い。

あかねさす日の大みかげかすむより天の下こそ春になりけれ

(千船集・尊孫・立春)

住吉のきしの山田のうは霞ふかきは松の色やそふらむ

(田上霞)

春日野やしのぶにあらぬかるかやも秋のみだれは限しられず

(荊萱)

さえざえしあらしは雪になりけり松の葉しろき夕暮の山

(" 夕雪)

のどかなる色かもなびく霞かないづらきのふのみねのしろ雪

(" 雪消山色静)

夕立の雨をのこせる竹むらの雫をわけて月ぞさしくる

(" 夏月透竹)

わくらばに結ぶ夢をもさますかなよふかき風の萩のともずり

(" 深夜萩)

いつしかと雪げの空の色かへて霞になびく春の白雲

(" 初春雲)

鶯のなくねばかりぞ残りけるかすみこめたる夕ぐれの山

(" 暮山霞)

花さそふをへの風吹にけり霞の中にきゆるしら雲

(" 霞中為花)

子規なくねも雲にかをる也花橘の軒のゆふ風

(" 郭公)

萩の葉にこまれる宿も冬のきてさらにおどろく風の音かな

(" 閑居初冬)

分くだる山はふもとに成ぬらし松より下の松のむら立

(" 麓松)

新古今風の伝統的な歌であるが、調べが張り叙情味もある佳品である。この種の歌は『鰻玉集』にも多くある。

吹おくるよ半の嵐やはやからし枕にちかきはつ雁の声

(広足・鰻玉集・初雁)

峰たかき松にいさよふ春風のひびきをこめて立霞かな

(" 嶺樹霞)

霞つゝ暮るゝ入江の浪のうへに月と花とのかげぞうかべる

(" 春江花月夜)

大空にまれなる星を松のはの露に見せたる秋のよの月

(" 月前松)

『鰻玉集』にもこの他に知的觀念の古今流の歌も多くある。景樹も言っているように長崎歌壇には新古今風が強く広足にも新古今風の歌風が強いが、又その種の歌に佳品が多い。元来彼は江戸派の流れを汲んでいるのだから新古今風があるのが当然である。しかし、その限りでは、彼は県居派末流の中世風の残滓を遺した歌風を継いだ歌人に過ぎなくなる。桂園派にも接触しているが、古今風の歌には佳作がないから、これはあまり彼の歌風により影響を与えてはいない。

しかし、広足の歌には次のような作品が僅かなが見られる。

わがやどの林といつか成にけん隣にうゑいさゝむら竹

(千船集・竹)

いとたれし柳のしなひくゝりゆく隣をかき春の山ざと

(" 柳隔隣家)

年は今くれはてぬらし大路ゆく人おとたえて鐘ひゞく也

(" 除夜)

袖ふれてきくのはにふにほはしゝあたりやいづこすみよしの浦

(" 海辺旅情)

山もとの竹のひとむら一すぢの道おくふかしたれかすむらむ

(" 山館竹)

明わたる風もしづけき湊江の浪をかすめてとぶつばめかな

(鰻玉集・燕)

これらの歌は、古今的というのでも新古今調でもない。実際に即した実感的なものがある。新古今風は写実的表現で耽美の世界を創作する。広足のこの種の歌は、題詠であっても実感的である。表現も、手のこんだ新古今風とは違っている。『鰻玉集』の次の歌は、

をじかなく秋の山田と見るばかり岡べのむぎふ色付にけり

(田舎にて)

近世後期、即ち天保時代から江戸末期の類題和歌集時代に、上位に安定した位置を保っていたのは中島広足である。江戸後期に質量共に大指導者であった香川景樹は天保一四年（一八四三）に没する。彼の優秀な門下生は桂園派として江戸末期から明治初期に活動していたが、師景樹ほどの力量はなく、前述類題和歌集に活躍している人々が、それぞれ比肩していたと思われる。

中島広足は学者としても多くの著書⁽⁷⁾を遺しているし、家集も『檀園集』『しのすだれ』（七集）の二集がある。前者には橋守部、青木永章が序文を書いている。熊本藩の藩士であるが、長崎に永く住み、六五歳、安政三年浪華に出て五年在住し、文久元年（一八六一）熊本に帰って国学師範役になり、文久四年、七三歳で熊本に没した。彼は和歌を千蔭門の一柳千古に学んだ。後、長崎在住の時近藤光輔等と香川景樹に批評を乞うているが、光輔は新古今調が強く過ぎると批判されている。そして、桂園派⁽⁸⁾に入門してもいる。住所を変え、学界、歌壇での交際も広くて、広く名が知れわたっていたのであろう。橋驒寛のような交際の狭い人でも、旅行の時大阪に回って広足を訪ねている。

『鰻玉集』第三編に、

平田篤胤にはじめて逢けるとき西の国にていにしへ学びをひろむべきはそこをたのみにおもふなりといへりけるに 広足

苗代のたのもしきとやおもふらんすたり蛙の力なき身を

とあるので平田篤胤にも逢って囑望されている。

彼の四八歳の時、天保一〇年に刊行した歌集『檀園集』の中の歌と、彼六九歳の年に刊行された『類題千船集』の中の彼の歌とはよく似ていて、晩年になっても四〇歳代の歌とそれほど変らなかつたと思うが、いまは類題和歌集中の作品だけをとり上げる。『類題千船集』中の彼の歌には、幾つかの種類がある。それだけに長所と短所を持った歌が混在している。多く目に付くのは古今的理知の観念的な歌と、

叙景ではあるが新古今的唯美主義の歌である。以下『千船集』の歌を挙げる。

さもこそは松にならはぬ色ならめ木の葉を分てちる紅葉かな

（千船集・広足・松間落葉）

いつかたに身の行末をてらすらん螢にかへしまどの灯

（ ” ” 窓灯）

春の日はあそばぬものもなかりけり糸さへ空にみだれくゝて

（ ” ” 遊糸）

このような知的な感想を加えた古今流の歌がかなり目につくし、

冬たちしみ山の庵とふ人もあらしのみこそ明しきりけれ

（ ” ” 初冬嵐）

しづのめがときあらひぎぬけふも又ほしてはぬらす村時雨かな

（ ” ” 時雨晴陰）

春夜のよふかきかねのひゞきには夢の枕の花ぞちりける

（ ” ” 春鐘）

このような叙情的な表現で古今流になっている歌もある。これらは伝統的表現の歌であって、近代の実感を表わしたのではなく、伝統的歌風の中でも欠点に属する作品である。万葉調と思われるものが僅か二首だけある。

吾門に馬の音すなり桜花咲ぬとつげし人やきぬらん

（ ” ” 依花客来）

ふはの山ゆふこえくれしたび人やわざみが原にいほりさすらん

（ ” ” 原）

新古今風の歌は数多く見られ、それは、その種の歌では拙い歌ではない。しかし、彼の晩年では既に近代の先驅が現われ始めているのである。

朝づまのわたりをいそぐくれ舟のくれゆく波路千鳥鳴なり

（千船集・広足・湖千鳥）

もあつたが、編者佐々木弘綱の師でもあつた。足代弘訓も弘綱の師である。

収載歌数を各編別に掲げたのは、『鰻玉集』では第一編は公募ではなく、編者諸平が自ら作品を集めて編集した。第二編以後は作品を募集して諸平が選したものである。しかも、文政十一年（一八二八）から安政元年（一八五四）までに七編十四巻を出版しているのだから、編によって周囲の事情が違って来る。編ごとの事情を知る必要がある。各編の歌数を掲げた。歌数が前半に傾いている歌人と、後半に数が多い歌人とがある。それは、時代と個人の事情の変化から来ているのである。

加納諸平、佐々木弘綱はそれぞれ『鰻玉集』と『千船集』の編集者であるので、自身の歌を多く取っているのは止むを得ない。諸平は最後の第七編だけに入れているが、跋文でことわりを言っているのは遠慮があつてのことである。『千船集』は藤原純門の序文によると、初め萩原広道が編集しかけたが途中で中止したので純門が広道に交渉して佐々木弘綱に後を継がせたのである。純門は近江信楽の人であるが県令とあるだけで経歴はよく分らない。その関係から広道の歌が多く入れられ、純門と土地を同じくする藤原景秀の歌が多く採られたとも考えられる。景秀の経歴も現在はよく分らない。又、佐々木景女、八歳、弘綱女というのが五四首あるが、これは父弘綱が自身の歌を娘の作のようにして掲載したのである。

『近世名家歌集』は近世の初め、木下長嘯子以後の作品を歴史的展望の下に採っている。既に大家として認められていた契沖、真淵、宣長、枝直、千蔭、春海、春庭、浜臣、芦庵、景樹らの歌を多数収載したのである。これらの人は百首以上である。それら当時の大家を別にして、近世後期当時の歌人で多数の作品を採られた人が表の初めの人々である。それに次ぐ人では、本居大平、富士谷御杖、野々口隆正、下河辺長流があり、又その下では、荷田春満、伴蒿蹊、小泉保

敬、夏目霽麿、藤原千広、橋本邦直、加茂季鷹等がある。『鰻玉集』『千船集』二集を通じて多数歌数を占めているのは次の人々である。

姓 名	鰻玉集	同順位	千船集	同順位	合計数
中 島 広 足	二三三	四	二八六	四	五〇九
加 納 諸 平	一七八	一〇	一九五	六	三七四
千 家 尊 孫	一四四	一三	二二二	五	三六五
仲 田 顕 忠	九四	二三	五三	一八	一〇七

このように、二集を通じて上位を占める人は広足、諸平、尊孫の三人だけである。更に『名家歌集』と比較すると、広足、尊孫は近世後期の歌人としては上位を占めている。なお、この『近世名家歌集』は『鰻玉集』と比較すると、大多数の歌人が重複しており、『鰻玉集』を素材として使っていることが知られる。それにしても、広足、諸平、尊孫の三人は、文政以後の歌壇に名家として認められていたと考えてよいであろう。その上、広足は、『鴨川集』に於ても三集まで一六八首という多数を収載されていて、不動の位置を占めている。

それにしても、本居大平、富士谷御杖は学者としても当時大家であり、浜臣、依平、春門、永章、文雄、弘訓、弘綱、知紀、直好、顕忠、歌城その他の人も、名ある歌人であつたと思われる。特に特色を持っているとも思われない多数の歌人群であるが、その作品の評価は既になされたとは言われない。多数の歌集も名が知られるだけで、所在も不明なものも多い。又、所在が知られていても、活版になつていないので見ることが容易でないものも多い。類題和歌集中の作品は必ずしもその人の代表作ではないが、その人の一部分を窺うことはできる。当時の歌壇に位置を占めていた人の作品はどんなものであろうか。

中島 広足	六	一〇	一七	三	一九	二三	一一	八九	長崎	千蔭系
香川 黄中	六	二	八	二一	二〇	一一	一	六九	京都	桂園
八田 知紀	四	八	一九	四	四	一三	五	五六	薩摩	桂園
石川 依平	三	一〇	一八	四	五	四	三	四七	遠江	宣長
近藤 光輔	四	三	八	八	三	四		三〇	長崎	大平・桂園
青木 永章	四	八	七	三	一	二	四	二九	長崎	大平
熊谷 直好	三	六	五	三	二	一		二〇	大阪	桂園
橘 千蔭								三四四	江戸	県居
賀茂 真淵								二三六	江戸	県居
村田 春海								二二一	江戸	県居
本居 宣長								一六二	伊勢	鈴屋

二

和歌史や文学史に位置を占めている歌人例えば、良寛、曙覧、元義、言道等が全く名を見せないが、名を見せても、元義が『鴨川集』に僅かに一首、言道が『千船集』に二首に過ぎないし、その他にも優れた歌人が加わっていないということがあって、この表だけで歌人の評価を決めてしまうことはできないが、近世後期、化政度以後の歌壇に於ける情勢の一斑を察知することはできるであろう。

『鰻王集』に参考として挙げた木下幸文、井上文雄、大田垣蓮月のように、現代では重く扱われている人が軽く扱われている例も多い。しかしそれは、作品の価値によるものではなく、類題和歌集の編集の事情、応募した歌人のその時の個人的事情、和歌集制作の年代的事情に左右されていることも非常に多い。

没後も重く扱われている『鰻玉集』の清水浜臣、富士谷御杖の例もあるが、『鰻玉集』で二六〇首の村田春門は天保七年（一八三六）に没したためか、『千船集』では少数作家になった。『鰻玉集』一八八首の青木永章も弘化元年（一八四四）に没したが、そのためか『千船集』には採られなかった。伴信友は『鰻玉集』七十二首であるが、『千船集』（安政四年一八五七）には一首だけである。彼は弘化三年（一八四六）に没した。

類題和歌集にはこのように種々の事情が付纏っている。『鰻玉集』三二八首で最高の夏目鑿磨は編者加納諸平の父であり、この歌集は父の作品を世に知らせるのが最初の目的であった。第二位の石川依平は父の友人であり、諸平の親しい人でもあった。しかし、依平は自身、実力を持ってもいた。『千船集』五二三首最高の井上文雄は実力

萩原広道	七五	三八〇	一四	一一六	大阪	鈴屋系
沖安海	五八	三一	一五	一〇四	伊勢	不詳
黒沢翁満	四六	三一	二六	一〇三	武蔵	なし
小林歌城	三二	二二	四四	九八	江戸	春海
横山桂子	四三		三五	七八	江戸	游清
本間游清	三〇	四三	一	七四	江戸	春海
前田夏蔭	三五	一九	一三	六七	江戸	浜臣
多良尾純門	三四	一六	八	五八	近江	弘綱
横山由清	一一	三八	七	五六	江戸	游清
仲田顕忠	四六	六	一	五三	江戸	遊翁
村井長央	二〇	一五	一〇	四五	伊勢	不詳
井上定子		三六	七	四三	江戸	文雄女
渡忠秋	四	二五	一三	四二	京都	桂園
松岡桑子	八	一九	一三	四〇	品川	不詳
松田直兄	三	二九	三	三五	京都	季鷹
中村良臣	二五	五	一	三一	摂津	大平

近世名家歌集多数歌収載者調査表

姓 名	一編	二編	三編	四編	五編	六編	七編	合計	出身地	系 統
大江広海	四九	五三	三七	二五	二四	一八	一五	二二七	京都	春海
千家尊孫	八	一一	一九	三	一七	三一	二四	一一三	出雲	宣長系
村田春門	一七	一九	一一	一七	一三	五	一二	九四	伊勢	宣長

畠山常操	一	三〇	四七	三二		六	一六	江戸	堂上
殿村安守	一〇三	六					一〇九	松坂	宣長
飯田秀雄		一八	二八	一七	二九		一〇六	鳥取	大平
仲田顕忠			九	五九		一七	九四	江戸	桂園
近藤光輔	一	四四	二三			一〇	九〇	長崎	大平・桂園
伴林光平				六	二	三三	七五	河内	諸平
伴信友	一五	七	一五	二八	二	五	七二	若狭	宣長
木下幸文					一二	三	三一	備前	桂園
井上文雄				九		六	一五	江戸	千蔭系
大田垣蓮月				一二		一	一三	京都	桂園

類題千船集多数歌収載者調査表

姓 名	一 編	二 編	三 編	合 計	出身地	系 統
井上文雄	一九九	一五三	一六一	五二三	江戸	千蔭系
足代弘訓	一八五	七八	六二	三二五	伊勢	久老
佐々木弘綱	一二九	九三	九〇	三二二	伊勢	弘訓
中島広足	八九	八八	一〇九	二八六	大阪	千蔭系
千家尊孫	七	九九	一一五	二二一	出雲	鈴屋系
加納諸平	七三	七二	五〇	一九五	和歌山	大平
藤尾景秀	六四	六〇	五五	一七九	近江	弘訓
八田知紀	二	九二	七一	一六五	薩摩	桂園
熊谷直好	七	一〇一	一二	一二〇	大阪	桂園

鯨玉集多数歌収載者調査表

姓 名	一編	二編	三編	四編	五編	六編	七編	合 計	出身地	系 統
夏目 麿	一七八	三五	六五	一八	二	一	二九	三二八	遠 江	宣長
石川 依平	七一	五一	六〇	一二	三	一一	五七	二七五	遠 江	春庭
村田 春門	一七四	二八	一九	二		二一	一六	二六〇	伊 勢	宣長
中島 広足		二五	七一	二八	五五	二七	一七	二二三	長 崎	千蔭系
本居 大平	一六七	四〇	一					二〇八	和歌山	鈴屋
富士谷 御杖	九二	一五				一	八九	一九七	京 都	富士谷
青木 永章	一一	二六	五六	三五	四六	五	九	一八八	長 崎	大平
瀬見 善水			五	三六	四六	二六	六九	一八二	和歌山	諸平
岩崎 美隆					五七	一〇七	一五	一七九	河 内	春門
加納 兄瓶							一七八	一七八	和歌山	大平
清水 浜臣	二七	五七	五三	一四			二二	一七三	江 戸	春海
臼井 治堅	(四編より改名)			二二	六三	六九	六	一五〇	鳥 取	
田中 芳樹		三〇	四〇	七	三三	二四	一五	一四九	周 防	大平
千家 尊孫		五	五一	二九	二八	一四	一七	一四四	出 雲	鈴屋系
長田 美年							三四	一三八	不 詳	
飯田 年平			三三	二五	四二	三五	二	一三七	鳥 取	諸平
熊代 繁里			一	三八	六〇	三五		一三四	和歌山	諸平
小野 務				一六	三九	三	七四	一三二	備 中	桂園
長沢 伴雄		三八	二六	三三	三三			一二八	和歌山	大平
竹内 直道	八七	三〇						一一七	松 坂	宣長

近世類題和歌集の歌人たち

—— 地方歌壇の問題 ——

辻 森 秀 英

一

近世江戸時代歌壇の特色の一つは、中世歌壇の独占中心地であった京都から、江戸、次いで地方に広がったことである。その概観的展望は既に発表した⁽¹⁾ので、ここでは詳説を略すが、地方に多くの有力な歌人を出した。それらの人は多くの派に分れており、又、日本全国に及んでいるので、一部有力な歌人の他はまだ十分に研究・評価されていない。一地方歌人に過ぎなかった橋曙覧や大隈言道などが、文学史的に正当に評価されて、文学史上に確固たる地位を与えられたのは明治も末期のことである。

曙覧は全く登場せず、言道は『類題千船集』に僅かに二首だけ収載されているに過ぎない類題和歌集であるが、多くの有名、無名の全国歌人の作品を集めていて、江戸時代後半の地方歌壇の現況を知らせている。その概略も既発表の拙論⁽²⁾に譲って省略する。

類題和歌集は古くからあったが、近世では江戸時代後期、文政一年（一八二八）一月に、本居大平門下である加納諸平が和歌山で編集して出版した『類題鰻玉集』の初編以来、他の地方でも多く出版されるようになった。各地で出版されたが、最大のものはこの類題和歌集で、安政元年八月（一八五四）に第七編を出すまでに、各編二冊、全部で十四冊と『鰻玉集作者姓名録』を出版した。第八編は現在未定稿で保存されているが、安政四年六月に諸平が没したので出版されなかった。

これに次ぐものは、嘉永元年（一八四八）に諸平と同門の長沢伴雄

が京都で初編を出版した『類題鴨川集』である。安政元年（一八五四）五郎集（第五編）を出すまでに一編二冊、全部で十冊を出版している。この後に続くのが『類題千船集』で、佐々木弘綱が伊勢白子で編集し万延元年一月（一八六〇）に一、二編を、慶応四年（一八六八）に三編を、それぞれ二冊ずつ計六冊を出版した。

それらは各人から作品を募集して編集したものだが、編集者自身が集録した類題歌集に『近世名家歌集』がある。平田篤胤門下の鈴木重胤が編集して天保一四年（一八四三）に出版したもので七巻より成っている。長嘯子、契沖等の先輩から真淵、宣長以下の大家、現代の歌人までに及んでいる。これら代表的な近世後期の類題和歌集から、文政、天保、安政の『類題鰻玉集』とそれに続く万延、慶応時代の『類題千船集』を選び、それに応募作品でない『近世名家歌集』について、地方在住の歌人を窺って見る。

『類題鰻玉集』は『作者姓名録』によると、第五編までで一七六〇人と記している。姓名録は五編までしかなく、六、七編の新出歌人数が明らかでないが、一編大体三、四百人の新出歌人があるので、二編で七百人とすれば二四六〇人ほどになる。『類題千船集』は第一編、三六二人、第二編新出二九四人、第三編新出一七九人、総計八三五人である。二集合わせて三二九五人となり二集重複歌人が八九人あるからそれを差引くと三二〇六人の歌人となる。

作品の実質価値は別として、その時代における評価を、収載歌数で一応の見当をつけるために、作者別の歌数を調査したのが次の表である。